

- ◆ 富士川の中流域において、地元自治体や関係者から「かつては水量が多く釣り人にとっては有数な川であったが、近年はその面影もない。流量の増加を望む。」などの意見が出されている。
- ◆ このような意見に対応するには、河川管理者や地元自治体、水利権者など、関係者の協力が不可欠。

【現状】

- ・ 富士川(中流域)は、魚(アユ)が少ないことから釣り人が減少している。
- ・ 富士川(支川の早川含む)から多くの水が利用されている。

【課題】

- ・ 魚(アユ)が減少した原因がわかっていない。
※考えられる原因⇒冷水病、カワウの食害、水量、河川形態、濁りなど

課題解決には、



関係者の協力が不可欠

～『富士川 中流域 アユを育む・清流プロジェクト』～

【構成メンバー案】

甲府河川国道事務所、山梨県、早川町、身延町、南部町、日本軽金属(株)

※今後、必要に応じて、関係者の追加を検討する。

【取り組み】

アユが減少した原因を究明した上で、アユが生息しやすい川づくりに関する対応を検討し、関係者が役割分担の中で各種取り組みを実施する。

さらに、その成果を評価及び検証し、効果的な取り組みを継続して実施していく。

※以下はイメージであり、具体的な取組内容は今後検討する。

- ・ 河川管理者：河川環境調査(瀬淵の分布、生物、水質、底質等)、河川パトロール・監視、河川整備の際の環境配慮(瀬や淵の保全・再生、大石の敷設)等
- ・ 地元自治体：住民意見の集約、地域と連携した河川美化活動、取組みの広報等
- ・ 水利権者：稚魚放流支援、ダム等運用の検討、河川環境現状調査、魚道の維持管理等



【目指す姿<目的>：魚(アユ)釣りが盛んで、人々から親しまれ、活気あふれる魅力的な河川】

かつての富士川は、流量が豊富で、アユ釣りや川遊びをする人々で活気があった。アユを指標種として、アユが生息しやすい川づくりに取り組み、かつてのようにアユ釣りが盛んで活気のある富士川の姿を目指す。